

詳報 第4回建設

ランナーフォーラム

②

ビジネスチャンスはさまざまな課題の解決から生まれる。そして、地域の建設業が取り組むべき課題の多くは地域にある。

■地元の軟弱地盤克服し新工法

加藤建設(愛知県蟹江町)の地元は海抜ゼロメートルの軟弱地盤地帯だ。その軟弱地盤を克服する戦いの末に新たな地盤改良工法である「パワーブレンダー工法」を生み出した。改良を重ね、深さ10メートルの施工深度や、リアルタイムの品質管理などを実現した。また、困難とされてい

●全体フォーラム事例発表II

た既設構造物の基礎補強を実現する「水平トレンチャー」を開発した。同工法を使い、東京都水道局の鋼製配水タンクの液状化対策も施工した。

このほかにも同社は、時代の要請である「環境」を主眼に、さまざまな技術開発に挑戦している。加藤社長は「新たな問題にぶつかるたびにそれを解決し、新工法をつくり出した原動力は、土木屋としての一人一人の技術力だったと考える。大地を相手にするエンジニアとしての感性を大切にすため、米づくり体験や近自然工法の社員研

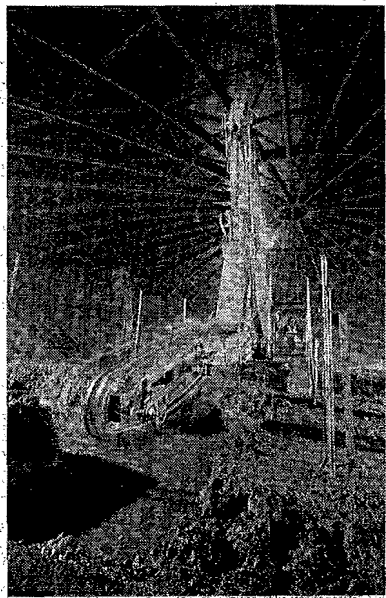
修もやっている。地域貢献をキーワードに介護事業 トライネット(長野県飯田市)は、地元の建設会社3社が合併して設立した。各企業が持ち寄った事業部門の再構築の一環で、ゴルフ練習場の土地活用として始めたのが介護ビジネスだった。2005年10月にオープンした有料老人ホームは2カ月で満室になった。ショートステイも半年後には稼働率が80%に達した。その後、高齢者専用住宅なども整備した。

熊谷喜久男社長は事業のポイントについて「介護施設は職員の良し悪しで決まる。雇用条件を明確にすれば優秀な人材が集まる。職員を経営・介護方針を共有できればおのずと結果はついてくる」と言う。

熊谷社長は「お客の感謝は利益以上のやりがい。地域貢献のキーワードで介護事業に参入すれば、地域の皆さんの建設業の見方も変わってくる」と呼び掛けた。

■サルトリイバラで島おこし 伊豆緑産(東京都三宅村)は、地域の嫌われ者だったつる植物「サルトリイバラ」を使ってビジネスを考えた。2000

年の火山噴火のガスの影響で、三宅島の半分は植物が育たない荒地地になった。その中でも生き残り、成長するサルトリイバラの赤い実。「そんなことやっても無駄だ」という周囲の声もあったが、この植物を多面的に見詰め、緑化・観光・健康の3本柱のビジネスの



既設構造物の基礎を補強する水平トレンチャー(加藤建設)

地域の課題をビジネスに

具体化を進めた。荒地地の緑化や切り枝の出荷、赤い実を生かしたクリスマスリースの制作、成分を生かしたサプリメントづくりなどに取り組んできた。同社森林産業部の成田信治氏は今後の課題について「事業はまだ投資段階。サルトリイバラの花言葉の通り『不屈の精神』で取り組む姿勢が必要」と語った。「サルトリイバラのつるが暗示を掛けてくれたような、さまざまな人との出会いの結果、「チャンスは赤い実となって育っている」

日本には建設業が必要です